

反原発運動論

おんな・革命・非暴力直接行動

向井 孝

はじめに

正直なところ、ぼくが反原発運動にかかわりだしてから、ほんの一年あまり。だからまだ右も左もわからぬかけ出しだ。

が、かけ出しはかけ出しなりに、いくらから見えてきたことがある。——と云えばとんだ「知ったかぶりのおしゃべり」だが、このように「ついちよつとしゃべりたくなる」新米なりに云うことが出てくる」のが、反原発が反原発のことにとどまらないゆえんだ。

それをぼくの実感に即して云うと

第一に、いちど反原発にかかわると、もうやめられない。

第二に、反原発のうけうり話が、ところかまわずしたくなる。

第三に、反原発バカ、というか、原発もの

しり、になることまちがいない。

第四に、自分のいまの、生き方、くらし方が変りだす。

第五に、世の中を変える——云うならば革命ということだが、自分の身近かなものとなる。

つまり或る日ふと気付くと、ナントいつのまにか自分が反原発のオルガナイザーになっていて、ついついしゃべり出している、というわけである。

× × ×

この五つのことは、たしかにぼく自身のなかにおこった、まちがいない実感である。そしてこの単純な実感が、「自分の生きかたを変え、世界を変える」——それこそ革命のはじまりなのだ云うとき、あまり飛躍があつて、顔をしかめる人があるかもしれない。

ては、ピンボケというか、あまり縁がない気がして……」

「うん。ムスカシイところやなあ……ぼくはカマの仲間にも関係ある……思つてるのやけど……やっぱし、ちよつと説明がいるやろなあ」

「つまり、きみらはよく『市民社会の解体なくして、釜ヶ崎の解放はない』というやろ。反原発というのは何より、その市民社会と運動参加者の小市民性を解体するもんなんや。」

「なんで……」

「現代市民社会が何よりの特徴とするのは、進歩と繁栄や。それを推しすすめてきたのが巨大科学、技術の発展。その結果は——いままら云うまでもなく——核兵器・環境汚染・公害社会であり、その進歩と繁栄はもうどうしようもない終末に近づいてきている。」

そして原発は、何よりもその現代文明の終末的頂点をいま体現しながら、国家と総資本の、唯一の延命策の意味をもって出てきたものに外ならへん……」

そうや、こう云うたらもつとはつきりする。政府の原発推進計画によると、約四〇兆円の投資が見込まれてる。この気が遠くなるような巨大な額は、構造不況にあがく資本の危

機にとつて、起死回生の特效薬、無二の救いの神。

だから、原発が不経済きわまる高いエネルギーだということが判つてきても、また原発のばらまく微量放射能や、不意の事故が、近い未来にどんな結末を世界にもたらすか、そのおそろしさが判つていても、ともかくにも国家と資本は、巨大な投資の（必要性）のために、ナニガナンデモやりぬくぞと云うわけや。

……と、もうこれだけでもはつきりしてするように、原発は、巨大投資というだけでなく、それ以上に地球上に破壊だけをもたらす、あの（戦争）とまったく同じく大浪費を特色としている。

一口で云うたら原発経済は戦争経済。

つまり原発は、国家と資本が人民に仕掛ける新手段の戦争みたいなもんやな——

さて、この原発と戦争についてもうすこしつけ加えるならば、原子力発電の技術は、そもそも原爆の材料プルトニウムをつくり出す必要のために開発された、という歴史が証明するように、まさしく戦争の申し子であり、人殺し科学が産み出したものである。

たしかに反原発運動の現況は、いまはまだ現地住民運動とよぶべきであり、革命などとは無縁と云つてよい。

にもかかわらずぼくは、すでに世界の反原発が全く新しい質の——非暴力直接行動に基礎をおいた——大変革運動として、とくにヨーロッパやアメリカをゆさぶっているように、やがて日本全土にひろがるだろうことを予感する。すでにその先触れに似た脈動は、至る処であらわれている。

そして、この文章はもうすこしそのことの内実にはわけ入つて、単に実感というだけでなく自分自身をも納得させたい、みんなにもきいてもらいたい——ということからはじまるのである。

I 原発と戦争経済

「きのう、保釈で出てきました」と、Aさんがやつてきた。彼はもう8、9年も山谷や釜ヶ崎で働いている、もとセクト系の活動家だ。たまたま悪徳手配師糾弾でバクられて、半年ほど未決拘留中だった。

「WRIニューズなど獄中で読んで、ちよつとばかり（原発）の勉強せなアカンと思つてたんやけど、出てみるとカマの人間にとつ

戦争経済の特色は、たとえば一発何百万円の弾丸を、原価を顧慮せず無数に使用してよいこと、つまり人命・財産を破壊するための、全く非生産的な大浪費だと云うことだ。一方原発経済は、そのはじめただプルトニウムを入手する開発のために、コストも操業率も無視して原発建設がすすめられたように、いま現在でも危険性や経済性など論外にして、しやにむに建設すればよい、という大浪費の必要で動かされている。しかも運転で出てきた死の灰の処分は、いまのところ方法がなくて次代への大きなツケをのこす。

もうひとつ、戦争経済の資金は、すべて国民のフトコロから吸い上げた税金。原発経済のカネは、消費者から徴収する電気料金、国民のフトコロから出ることでは、まったく同じだ。

——この電気料金というシロモノ、政府の認可によつて文句なしにきめられてしまうのだが、電力会社が巨大投資をすればするほど、電気料値上げができてモウカル（電気料金算定方式）のからくりがある。ごく簡単に図式化すると

たとえば、何が何でも原発に反対する女たちのグループのピラは次のようにそれを説明している。

「……高度成長経済の終末的象徴ともいえるべき原発に反対するとき、私たちは無意識的にもそれを支えてきた生き方、暮し方、価値基準の大変革を迫られるのです。それは又、私たちが日頃抱えてきた問いの、行きついたりところのものと同じです。……」

原発は、さらなる管理社会をおしすすめる支配と抑圧の象徴とも云えるものです。男自身にも歯向ってくる男社会の産物なのです。

その意味で私たちの反原発は、これまでの運動がもちえなかった新しい質をつくってゆくものでなければならず、それは女たちの中にも深く根ざしている男のもの、男の発想との闘いでもあります。

運動の間からも切りすてられてきた女だからこそ、そして男社会の中では男志向を持ち、自らの「女」を否定してきた女だからこそ、反原発を考えること、女である自分の解放を考えることは、ピタリ一致します……」

また、とくにおんな差別は、原発がばらまき微量放射能、その遺伝的障害が「おんな・こども」に何よりもまず影響するという、そ

の軽視においても明らかである。

そしてアメリカの反原発運動が、いつも半数以上を女たちで占め、その活動のなかでフェミニズム運動をも拡大しているのは、女たちにとって反原発がまた反差別的闘いそのものだからにほかならない。それゆえにこそ彼女たちが叫ぶ「女がやらんで誰がやる」反原発」となるのである。

第二に—原発はかならず過疎地にかぎって立地される。だが、どんなに過疎だと云われるところでも、完全に無人であるようなところろは、日本にはない。

事故があれば、どんな僻地でも被爆者が発生する。たとえ小数でも被爆した当事者にとつての問題は、僻地と都会を問わない。つまり、都市の大量被爆は困るが、僻地の小数被爆はやむをえない、都市の汚染は困るが、僻地はかまわない—という選択の根底にある原発の思想ともいえるべきものは、一体何か。

—スペインが南米インカに文明をもたらしたというとき、その珍らしい文明でもってインカを野獣のように狩りたて、容赦なくインカをみなごろしにすることができた。それは現代の進歩・繁栄を誇る都市文化が、過疎僻地

にのこされた豊かな天然を、ほしいままにする優越と傲岸、科学文明の名において何事も許されんとする、小数弱者への侮蔑、思いあがりとして、いま原発にあらわれているものである。それはまた、ビキニ環礁の住民数百人が、放射能汚染によって定住の島を追われ、三〇年ちかい流離のはて、なお帰郷できないという運命をつくり出してきているものだ。そしてこのような僻地・小数の地域差別を維持させるものは、16世紀のスペイン人が用いた剣や火器にかわって、いまはさまざまなペテンと法律と札束のあぐくの機動隊なのである。

もうひとつ、第三に、原発はその必要として、どうしても差別労働を不可欠とする。とくに故障したときの原子炉内部作業のために、使い捨てあるいはモルモットにひとしい下請けの、下層労働者がいなくてはならない。

ぼくが住む釜ヶ崎でも、原発作業の下請け求人者が二三年まえはよくあつたらしい。

以下は、オッサンとよばれる四〇才ちよつとの、カマのなかが語つたという話の、又聞きである。

「——おとこのこと、センターの手配で敦賀へいった。カマから三人。身体検査で二

人がハネられた。現場には九州と北陸からもきていた。全部で四〇人ばかり。仕事は原子炉建屋内の床ラバーのとりかえ。ほんとの仕事は数分だけ。すぐ交替して楽なモンやつた。それで日当三万円……」

これだけで判るように、原発の危険箇所の作業、修理は、下請けを何次も経由して、カマなどから一回きりの労働力を、それこそ使い捨てに使う。どこの馬の骨とも知れぬ連中であればあるほど、あつくされなし。発病しても、一切知らぬですむというわけ。(とすればカマのなかまとして、原発なんか関係ない—というのは、資本の思うツボである!)

放射線は人間の五体では全く感じられない。作業中いつ、どこで、どれだけ浴びたか、線量計のうごき以外、本人には自覚すらない。浴びたからといって、すぐ症状が出るとは限らない。また許容量以下だから安心とも、決して云えない。致死的な量を浴びても、発現するのは数日後である。何年もたつてから発病するのがふつうで、10年20年後もめづらしくない。たとえば20数年前アメリカネバダの核実験演習に参加させられた兵士数千人が、ま

さにそれを裏書する。

そしてこの症状の遅発性を逆利用して、「被爆事故かくし」をやりにめいているのが政府と電力会社である。「この十年間すくなくとも七五人以上の死亡者が出ている—」という国会での質問に、「死亡と被爆との因果関係は証明できない」と答弁し、さらに「いままで一人の死亡者も出したことない」とひらきな

なあって、宣伝さえるのである。このことは何よりもカマのような存在を必要としている原発の、その根底にある思想としての、差別を、露骨に表現するものでなく、何だろうか。

IV 女と反原発の意味

いま原発は、政府と総資本にとつて、絶対的経済的必要性であり、それゆえ最大の政治課題となりつつある。

だが対照的に、私たち、とくに女たちにとつての反原発は、そのような「天下国家の一大事」という視点からではない。しごく日常的な暮らしの問題—電気や水や空気が、魚・野菜・牛乳、そして日々の生計と生活環境の問題であり、さらに自分のこども、孫たちの未来にかかわることである。その意味では、

とくに女たちに何よりもピンとくるのである。

このようにして政治的に無関心な男や、女も、ふとさそわれて講座で原発の話きくと、何らかのキッカケが何回かできたとする。とたんに、もう原発バカと云われようとも、こと原発に関することならなんでもかんでも——テレビのニュースの一コマとか、新聞記事の一行とか、電車の中の吊広告までも——パツと目につくようになる。さらに、もう一回ぐらいいのキッカケがあると、自分で本を読み、集会に出かけ、せつせと情報を仕入れて、半年あまりでびつくりするほどの「原発ものしり」となる。

しかも新知識を仕入れると、すぐにも隣人へしゃべりたいの一心。次から次へ新しく、ショッキングなタネが出てきて、まあ一年ぐらいはとまらない。

こうしてある日、ふとわれにかえると、まるで自分では思いもけなかつた大変貌。

「もはやこの二〇世紀社会を支えている進歩と繁栄の思想と文化・政治こそが問題だ……」と、いつしか自分の生き方、くらし方をも含めた世の中の変革を考え、となえだしているに気が付いて、おどろくのである。そして、いま政府や電力資本が大わらわで、

市民社会を恫喝する宣伝「もし電気が足らなくなつたら、どうする？」に対して「もうこれ以上電気はいらん」と答えるとき、それはもっともラジカルで革命的な立場へ、こけおどかしや背のびではない第一歩をふみ出したということである。

しかもそれを、ナントまったく政治に無縁の女たちが立上って、口々に叫びだす。これは権力者たちにとって腰をぬかすほどのオドロキであり、始末におえぬことにちがいない。こうして反原発運動の何よりの特質は、ひとりひとり運動者の生き方暮らし方をも変えることを迫りながら、この世の中の仕組みを、しかと見すえての女の解放運動でもあるということになる。

「女の解放」とあらためて云うとき、反原発運動が既往の政治主義的、男社会的発想から出てきた運動と全くちがったものとならざるをえないのは、わかりきったことである。いま大阪の反原発運動では、ほとんど女たちが担い、推進し、不可欠の中心として活動している。そのことでの、たとえばデモのやり方、ピラの書き方、まき方、集会のやり方、話し方、そして聞き方までが大きく変り、新しい発想がつけ加えられることで、参加者全

体の創意が、まさに百花斉放の感じで展開されはじめ、他の運動への波及がおこっている。それはまだ局地的な特別の例だと云うとしても、世界の反原発運動が、何よりも女たちを不可欠の戦闘者として、主力となる仲間として展開している趨勢は、もう誰も否むべくもない。

それは男たちにとって、いままで包摂しえなかつた世界の半分の人口—おんなたちと共に闘う、大きな戦線がはじめて出現しつつある、ということである。

というよりむしろ、既往のあらゆる運動一般にあつた男の発想としての組織論、政治主義が、ひとつひとつ点検され正されながら、はじめておんなとおとこが一つになった巨きな運動が、反原発として現われてきた—ということにほかならない。

それは、男たちの既成の革命概念をも革命することにおいて、具体的には男たちの生き方をかえ、別して男たちの権力社会をひっくりかえす文化大革命ともいうべき内実をもつものなのである。

V 非暴力直接行動と女の解放

反原発運動が女の解放運動であり、文化大

のである。
× × ×
フランスでは反原発運動を担う人々を、自主管理エコロジスト、と呼ぶという。

現代文明の頂点—原子力に反対する立場は、当然、それに代わる文明観、それにもとづく自分のくらし方、その社会づくりを問題とせずにはおれない。それゆえ原発は、ただ安全性や経済性、必要性の問題だけでなく、自主、自治、自律、自己管理の問題であり、いままどと別の生き方、別の運動のやり方、別の闘い方をつくりだすものなのだ。

直接行動の本来の意味は、まず何よりも「自分の生活に必要なものを自分の力で作り入手するための労働、または行為」である。非暴力とは、そのことを保証する社会的状況—自治管理にほかならない。

それゆえ非暴力直接行動は、すぐれて暴力と対立する。その暴力に対する闘争の創造において、従来の闘争概念をかえる。

それは、たとえば反原発運動のなかに、まだ尾を曳いている既成の組織のあり方、運動のすすめ方、闘争の形態、その人間関係—男と女、こども、老人、有能者と無能視されて

いる者、肉体的強者と弱者、雄弁家とだまり勝ちの者、優等生と落ちこぼれなど、とくに運動内での目にはみえない上下関係の差別—の点検、ひっくりかえし、再認識から、まずはじめられねばならない。

去る10月26日、大阪の反原子力週間の（関西電力への抗議デモ）の先頭で見た実例だが、女たちが、順番でマイクをまわした。それは、ただ勇ましい？だけで意味不明のシユプレヒコール紋切型から脱却できたという効果以上に、デモで号令するなど生れてはじめての経験の彼女たちの、関西弁のしゃべりことばでトチったり口ごもったりするユーモラスな愛嬌と親しさが、みんなの拍手やカケ声をも誘発して、一そう賑やかで明るく和やかで、通行市民の注目をあつめることになった。

このことは、いままで考えもしなかつたことを、ひよいとした思いつきから、まずやってみるということだけでなく、積極的にそのことを良しと評価する見方、考え方、受けとめ方が、行動の新しさをづくり出す、ということを示唆している。（それは「人民に学ぶ」などという、指導者意識をのりこえたものだ。）

さきに云つた「女たちをも不可欠の戦闘員として……」とは、まさにこのようにして生れてくる闘い方である。その意味では、いま

革命だというとき、それを別の一面から何よりも具体的にあらわすものは、「非暴力直接行動」である。

いまでもなく、人民の抵抗とその闘争は、かならず国家の暴力の抑圧をまぬがれない。それゆえ権力に対する闘争が根底的であればあるほど、暴力の組織化に拠らざるをえなかつた—というのが人民の闘争の歴史である。だがまたその歴史は、権力に對抗しうるような有力な暴力は、かならず抑圧的であり、微力な手段は無効である—という結果を教えている。つまり人民が、権力者に対して充分對抗しうる集団をつくりお世話するとき、その集団もまた（それが政党であろうと、労働組合であろうと、また解放軍と云われようと）、自分らが打倒しなければならぬとした暴力的制度のあらゆる欠陥を、その内部にそっくり再生産してきた。すなわち官僚組織、手段と目的の背反、主体的個人の抹殺、そして再び抑圧の組織として、人民に君臨する権力体制である。

このことは（非強権主義をかかげながら、しかも暴力にみちびかれた闘争は、かならず人民を裏切る結果をもたらす）という、きわめて切実な現代史的課題をあきらかにするも

まではせいぜい後衛とかセメントの砂としての参加でしかなかつた人たちがこそが、主役となり先駆となるような闘いが、非暴力直接行動の、最初の要件というべきものである。

それゆえにまた非暴力直接行動は、参加のそれぞれの立場、条件、弱点や特長を、かえって武器として引き出し、さまざま分野で自発的に展開される百人百様の創造力、そして統一でなく自由な連合をこそ（力）とする闘い方である。

それは第一に、権力が予定する集中的暴力の行使をほとんど無力化し、空振りさせる。

第二に、権力の最大の武器である暴力行使の口実ときっかけをどのようにも与えない。

第三に、敵が設定した暴力の土俵へ昇るのではなく、こちら側がつくつた非暴力の土俵へと敵をひきこむ。ゲリラとして、闘争のヘゲモニーを自分たちがにぎる。

第四に、非暴力直接行動は、単に戦術なのではない。それは人民の原理であり、人民のみが行使しうる人民の闘争方法である。その運動とは、その行動自体のなかで、原子力社会にとつてかわる新しい社会を具現していく、一歩一歩の革命にほかならない。

別して人類の歴史がとめどなく繰り返して

きた(暴力のサイクル)が、ついに私たちの時代で打切られることを意味する。

このように非暴力直接行動は、権力が万が一にも、とくに女たちや「弱者」に暴力を行使するとき、それが誰にも明らかな不当性と背徳であることを、市民の眼と世論に照し出すものである。その暴力の結果が大きければ大きいほど、権力側は指弾され、ボロを出し、政治的にも打撃をうけざるをえない。

とくに権力にとつての原発推進が、何よりもまず国民へ、バラ色の夢をふりまくムード作戦であるとき、その暴力の結果は、せつかくのイメージをぶちこわす大きなマイナスの戦術となるだろう。

VI 非暴力直接行動と原発

いま世界各国における非暴力直接行動はうねり高まる原発の発動の大潮流そのものとしてとどろきながら、ようやく日本の岸辺をも洗い出している。そして日本の原発運動が、やがて非暴力直接行動を自分のものとして取りあげるだろうという問題は、きわめて重大な意味をもつ。それは、権力の暴力的弾圧に対して、私たちの新しい闘い方—非暴力直接行動が容易に勝利する、ということ

純に意味するものでは決してない。

たとえばアメリカ・シールック原発予定地で、一八〇〇人がその敷地を非暴力占拠した闘争は、追いつめられた権力が最後に、かならず行使する暴力への対応のために、一年ちかい準備が行われ、20人単位ほどの小グループから出た数百人による一週間以上の非暴カトレ、ニングを必要とした。さらに単位グループの訓練者によって、非暴力直接行動の戦術展開を、全員に周知徹底する方法が、たえず追及された上でのことだった。

また、ヨーロッパ・アメリカの非暴力直接行動が、いざというとき数万人の人々をいつもあつめている—という事実は、原発運動が、より積極的に他の諸運動とのつながりをつくらねばならぬ—ということを示している。

云うならば、反戦、反公害、反差別、にかかわる地域・個別の諸運動と通底する原発運動は、いまはまだ分散、孤立している各分野の諸運動を媒介・連合するものである。

その媒介と連合とは、ごく単純に云って、いまは原発の直接的分野に限られている運動が、たとえば三里塚闘争—そのように他の運動—との積極的共闘によって、三里塚闘争に新しい展望と力を加えることである。すく

なくとも、そのことを契機とする三里塚と非暴力直接行動、女と三里塚は、三里塚やその他の運動内部の見失われていた問題を引き出し闘争の進化を生まざるをえない。このようにして、原発と他の諸運動との自由な連合—共同戦線—の形成が、ひろい分野にわたってつくりられ、政治主義やセクト性をのりこえようとするとき、それはまさに、文化大革命であり、近づく80年代闘争の方向と帰趨をも定めるものとなるにちがいない。

さいごに、都市住民としての運動について、一言しておきたい。

いま、国家と総資本は一体となつて、原発推進キャンペーンにけんめいだ。

年間の原発宣伝費総額三百億円！が意味するものは—ことしの原発安全研究費予算が、大著増して八〇余億円！と比べるまでもなく—何よりも大宣伝戦争を、原発運動に仕掛けてきている、ということである。

だがその仕掛けの焦点ともいふべきものは—彼らが何よりもまず説得や了解を取りつきたいと思つている—原発現地周辺の関係住民にはない。それらに対しては札束と脅迫—最終的には機動隊の暴力で、容易に処置でき

同志よ、健康で

木原 実

銀座から東銀座
長い地下道に迷った

東京に四十年
銀座は変わったか

低血圧でずっときたのに
食餌は薄味でという

モスクワに帰る教授は
ぼくの肩を抱いて

同志よ、健康で
それから地下道をもぐって、迷った

電車は成田空港行
夕刊で革命詩人郭沫若の追悼記を説

みながら眠った
隅田川を越えた

雨が吹きこんでくる
わが行先はわが選挙区

ブラットホームの夜が更け
萬事、薄味にという声がある

同志よ、健康で
銀座はまだとまどいのなかにある

る。

この大宣伝戦争は、そのアメとムチ—最大の頼みである暴力—では、どうすることもできない大多数の人たち—つまり原発問題に無関心・無縁な都市の一般市民—の動向こそが、最終的に原発推進の成否を左右する、ということを知っている彼らの側の、必死の対応—いわば非暴力「間接」行動ともいふべきもの—なのである。

それは私たちの側の非暴力直接行動に対する先制攻撃であり、原発運動の無力化工作である。つまり都市住民の「原発無関心」を、いまそのままの状況で囲い込むことによって、市民と分離した原発運動の小数化を、私たちにおしつけることである。

すなわち、豊富な資金を湯水のように使消して「原発は安全で経済的な未来のエネルギー」をイメージさせる宣伝は、決して原発そのものを本格的、積極的に理解させるためのもの、ではない。

かえって逆に、原発への無関心、無関係をよりひろげた世論の醸成こそが、宣伝戦の最大の戦略目標である。たとえば昨年、ことしとつくりられた科学技術庁の「原子の日ポスター」ひとつをみても、それは何より明らかと

云えるだろう。

ところが、この大宣伝戦争に対して、私たちはほとんど手をつかぬまま、充分な対応をやつてこなかった—ということがある。

都市の運動として、ときどき学習会や講座をひらきながら、すこぶる自信なげに—「運動はやはり現地。都会では、どうしたらよいか、むずかしい。」—というような現地主義(それをまちがいというのではない)—の前で、つい立止ってしまつていた。

つまり、つい何となく今までの運動の進め方、闘争観にひきずられて、新しいやり方を見つけれなかった。そしてぼくらが、せつかく原発問題にはじめて出合ったときの、すぐピンときた自分の(「実感」)を、大したことがないとして無視したり、見逃したままできたのである。

いま、ぼくの考えに即して云えば、都市の原発運動にまず求められるのは、最初にピンときたその実感を、運動出発の第一におくことである。自分の身辺日常から出て来ざるをえないうごきを土台として、運動をつくり出していくことである。

すなわち、政府側の官民マスコミ機関を動

員した、「数うてば当たる」式のPR・CR
・イメージ作戦と対照的な、「一発必中、ネ
ズミ算作戦」こそが、もつともつと意識化さ
れねばならない。

もつと簡単に云えば「ひそひそ耳うち、井
戸端会議」こそがそれにほかならない。そこ
からはじまった、三人、五人、十人の、小數
であるほど質的に深めることができる、講座、
講演、展示、紙芝居、スライド、映画の会で
あり、パンフ、本、ビラ、写真、ポスター、
ステッカーつくりと配布であり、ゲリラシア
ター、デモ、坐り込みなどの行動である。も
ちろんそれらの展開には、ほんのちよつぱり
でも創意がつけ加えられ、そのたびごとにあ
たらしい戦術が工夫されねばならない。その
ちよつぱりの創意こそが、非暴力直接行動で
ある。

なかでも、政府や電力会社が市中にその姿
をあらわすときたとえば電気記念日、原子
の日、サービス月間、省エネルギーフェア、
核燃料輸送車の通過日などは、とりわけ敵
を攻撃する絶好のチャンスであり、反キャン
ペーンとしてのいろんなやり方―敵の弱味の
ひき出し―が、さまざまに展開できる機会で
ある。

とくに最近、改めてとらえ直されてきた電
気料金不払い運動は、それが特定の問題と
たとえば大阪の日高に原発つくらせへんぞ！
不払い連のように―結びつけることで、二重
三重の闘いをつくり出すことができる。

そして、不払いの意志表示、警告、自動振
替払いの中止からはじまって、電気料金のか
らくり暴露、組織拡大活動、ことある毎の抗
議行動―最後の電灯線を切りぬく時まで―
考えられる十いくつの段階と状況を、こちら
側で設定するとき、まさに電力会社が相手に
なってくれる（非暴力トレーニング）の学校
と云つてよいだろう。

何しろ、こちらはお客様。相手は決して先
手攻撃できないことだけでも不払い運
動は、一方的で気の毒みたいな、非暴力直接
行動としての、ゲリラ戦の無限の宝庫である。

もし反原発運動が不払い運動を、ごく一部
の人たちだけに任せて見逃がすならば、もつ
とも強力で千変万化に活用できる最大の攻撃
武器を、むざむざ捨てている！というほかな
いのである。

— 完 —

秋

となりの猫が来てあまえる。
抱きあげるとのどを鳴らし
手などなめまわし
しまいに痛いほど頬つべたに噛みついた。
蹴とばすと一目散。
次の日もまた来てのどを鳴らす。
バカヤロ。

○
赤いものが畑の草のなかにある。
とつてみると酸漿（ほおづき）。
モチの木の実も赤く落ちて
それを十粒ばかりひろった。
どんぐりも六つ七つ。
いっしょに机の上のせて
一週間ばかり。

○
落ちたばかりのドングリの尻の青い、
この真午間（まっぴるま）。
誰と逢えるか見当もつかない。
人も自分も近頃気のないはなしばかり。
法螺でかまわぬ。
新鮮を欲する。

（直方十郎）

道化の旅

長谷川七郎

谷にかかる
最後の吊橋をわたり
林道に入つてからの道のりが
意外とながかつた
季節の移ろいのように
確実な足の萎えが気を滅入らせた
やがて芒の穂がきらめく
白茶けた川原が見え
帰路の駅につづく国道にでるだろう

一日のばしの あれは幾日前になるか
ゴーストタウンのような
人つ気のない 鉱泉部落をすぎ
ジグザグな山道にかかるころ
時雨がななめにふきつけた
ふりむくと、雨女へと
笑うと弓なりの線になる
麻子の目と会つた
無人の峠の避難小屋で抱いた
気味わるがる麻子の 押された胸から

冷たい雨が肌にとおつた
素板ばりのすきまを洩れる光が
麻子のうなじを縞に染めた
風が梢を鳴らし 雲が千切れてはとび去つた

ときどき点滅する宿の
うす暗い電灯の下で
死ぬことの安易さの訴えを
こともなげに笑うオトコを
麻子がうとましげにながめた
オトコのためにわざわざ用意してきた罐詰を
麻子がひとりで ゆっくりした動作で口に運んだ
雨が止むと 川の音が急にたかまり
夜更けの冷気が部屋にながれこんだ

水しぶきでぬめる対岸の
閃緑粉岩の柱状摂理がつきたあたりで
道がゆるいのがぼり勾配になり、息がはずんだ
朽おちる前の黄や褐色に縮んだ葉っぱの雑木林がしばらく
つづいた
瀬を横ぎる途中で 裾をたくしあげた麻子の
むきだしの下肢がたちすくみ
すがつた手はげしく引きもどされた
目なかいの滝につながる谷川がくさび状に合流する地点が
釜になつて白い水泡が渦巻いて湧きかえつた